

Living museums

再びよみがえった佐用町昆虫館 地域に根ざした小さな館の生き方

NPO 法人子どもとむしの会・兵庫県立人と自然の博物館 八木 剛



シーズン開幕を祝して、ちびっこテープカットが行われた。2010年4月4日(日)



水害直後の昆虫館正面



感慨深い再開。菜の花は近隣農家からのプレゼント

佐用町昆虫館は、敷地面積 942㎡、延べ床面積 165㎡の、小さな館である。1971年に開館した旧兵庫県昆虫館は、財政難、人材難により県が廃止した。それを、人口2万人弱の佐用町が受け継ぎ、NPO法人子どもとむしの会が指定管理者となってボランティアの手による運営を開始した(本誌88号)。ところが昆虫館は、開館から4ヶ月後、台風による水害に見舞われ、休館を余儀なくされた。本誌90号では、水害のようすを紹介するとともに、復興支援の呼びかけに紙面を提供いただいた。各地の博物館、NPO等の団体、企業から寄せられた義援金は120件、200万円を超えた。おかげで、町の復旧予算ではまかなえなかった内装工事や代替物品の購入ができ、2010年4月、昆虫館は、水害の日から236日目、再び開館することができた。佐用町昆虫館再開への歩みを振り返り、ミュージアムの生き方を考えてみたい。

水害のときになすべきこと：助け合い

水害はたいへんだ。テレビや新聞で、水害の後、大量の家具が廃棄されている映像を見ることがあるが、その理由がよくわかった。いったん水に浸かった木製

品は、狂いが生じて使い物にならない。泥水は家具の隅々、ボールペンの中にまで侵入し、一週間もすればカビがすさまじく繁殖する。結果として、家具は廃棄、壁は塗り替え、床は張り替えを余儀なくされる。復旧作業は、肉体的、精神的、そして経済的にたいへんなことである。

昆虫館の場合、敷地には大量の土石が堆積し、厚いところでは1mを超えていた。敷地内の土砂はざっと150~200㎡。ちょっとやそっとではどうにもならない。

町の施設であるから、指定管理者は小さい手を触れず、役場の調査と判断を待つのも一つの方法であった。しかし、多くの会員は、当然のように復旧作業に動き出した。阪神・淡路大震災を経験している会員が多いことも、迅速な動きの背景にあるかもしれない。同時に、地元集落の救援に力を注いだ。自身も水害経験のある理事は「昆虫館の復旧に水を差すようだが、こんなときは地域での助け合いが当然だ。自治会長らと連絡を取り、協調するように」と檄を飛ばした。昆虫館のある集落は、佐用町中心部から車で30分程度を要する。災害の報道やボランティアの応援は、佐用町中心部に集中していた。そのような中で、我々の救援活

動は、地元自治会からも感謝された。裏を返せば、近隣家屋を顧みず昆虫館の復旧作業に専念していたら、昆虫館の復旧はなかったかもしれない。

資金集めとネットワーク

何事にも、先立つものが必要である。未曾有の災害の中で、昆虫館の復旧を凍結されることがいちばんの懸念であったが、町は500万円の予算を用意した。激甚災害に指定される見通しがあったとはいえ、小さな町がスムーズに予算措置をした背景には、わずか4ヶ月の間であったが、我々の館運営が評価され、災害復旧にかける努力が、認められた証拠であった。

工事費の積算に知識のある会員によると、復旧にかかる経費は、およそ800万円と見積もられた。資金が不足するため、以後、積極的に義援金の募集を行った。本誌をはじめ、全国各地の支援者の方々に、厚くお礼を申し上げる。義援金のお願いは、単なる資金集めではなく、昆虫館のPR、人から人へのつながりに発展した。災害はいつどこにやってくるかわからない。今回の経験を、小規模ミュージアムの支援ネットワークに活かしていきたい。

開館しなくても、できるサービス

町の子どもたちに楽しい体験を提供することが昆虫館の使命であるとすれば、施設は閉鎖していても、できることがあるはずだ。そこで、10月には、いどうこんちゅうかん、出前昆虫教室と称し、町内の保育園、幼稚園、小学校に、出向くことにした。じつは、昆虫館の来館者のうち、佐用町民の割合は、全体の2割に満たず、町の施設として、町民へのサービスを充実させることが課題となっていた。そのため、館に呼び込むのではなく、各地へ出かけて行くことを考えていたが、水害によって、計画を前倒して実施することになった。急な企画であったにも関わらず、希望校園は多く、受け入れもたいへんスムーズに行われた。中には水害で児童を亡くした学校もあったが、子どもたちに楽しい経験を提供できたことは、大きな収穫であった。

地元自治会長によると、「また来てくれへんの?」と子どもが言っているという。町内の小学校は10校、幼稚園、保育園も合わせて10園である。新年度は全小学校、幼稚園、保育園に出かける計画である。

水害を通して見えてきたこと

もしこの水害が1年前だったら、昆虫館はどうなっていただろう。2008年8月頃といえば、県の施設を佐用町に譲渡することがようやく確定し、開館日数や「昆虫館条例」をどうしようかと、町役場との間で水面下の折衝が続けられていた。むしの会の内部でも、指定管理者となって施設の管理にも責任を持つことに対しては、慎重論も根強かった。その頃に水害があったとしたら、おそらく佐用町役場も地元も「この話はいったんなかったこと」にしただろう。そして、すでに廃止決定していた県は被災した施設を爾々と撤去し、何の実績もないむしの会の側も、施設の惨状を目の前にして再開を強く主張できなかつたに違いない。



水害直後の広場。1m近い土砂に覆われていた

佐用町昆虫館が、今回、すみやかな復旧を遂げたのは、1年前とは明らかに事情が変化していたからである。

一つ目の変化は、むしの会の多くの会員が、自分たちの館として昆虫館に愛着を持つようになったことである。指定管理者として町に成り代わって施設を管理することになり、しかも、会員が交代で「一日館長」としてボランティアで運営するというしくみを導入した。もし、昆虫館が町の直営で、特定の人物が雇用されていたならば、多くの会員は「応援はするが主体ではない」というスタンスで様子見していたことだろう。指定管理者制度は、ミュージアム経営に意欲のある者が当事者とな



標本展示台は会員が修繕して使うことに

れる制度である。「一日館長」方式は、非効率、不安定きわまりないが、多くの会員のモチベーションを高め、災害復旧にもその力が発揮された。

もう一つの変化は、館運営や復旧作業の過程で地元から信頼されるようになったことである。地方の小さな館は、地元との関係を抜きにして、存在し得ない。

昆虫館立ち上げの当初、町役場がむしの会の動向を説明した際、地元自治会からは「神戸・大阪から集まってきて、村をどうするつもりか」と警戒していたという。その後も、自治会との会合のたびに「マナーの悪い客が畑を荒らすと困る」などと、釘を刺されていた。



幼稚園での「いどうこんちゅうかん」のようす

そのような不審感を払拭したのは、自治会長会議へ毎月出席して顔を合わせ、事あるごとに相談するなど、日常的な会話の積み重ねであった。そして、今回の水害は、災いではあったが、我々の救援活動は、結果的に、地域からの信頼を得るのに大きく貢献した。

館が生きているということ

神戸大学大学院の竹田真木生教授が昆虫館復活の先頭に立ったのは「博物館はどんなスケールであれ、そこにあることこそが、重要なはずだ」との思いだった。佐用町昆虫館は、各地の子どもたちにさまざまな体験を提供し、昆虫に関心のある広域の利用者にとって重要な施設となった。同時に、昆虫館が「そこにあること」は、直接の利用者ではない地元の人々にも理解されるようになってきた。

昆虫館の周辺集落は、各地の過疎地と同じ悩みを抱えている。我々がパートナーとして受け入れられれば、地域づくりに貢献する機会も多くなるだろう。今後の展開が楽しみである。ミュージアムは、よそ者や若者を地域に呼び込むための装置でもあるのではないかと。

ミュージアムにとって、来館者に対するサービスは重要である。しかし、ミュージアムが生きているということは、それだけでは語れない。来館者、職員も含む担い手、必ずしも利用者ではない地元自治会や設置者など、多くの人々の理解と支持が何層にも積み重なりあひ、響きあって、ミュージアムは生きている。これは、あたかも自然の生態系のようなものである。食べ物は生きるために必要な条件の一つでしかない。敵も仲間もお互いに関係し合って生きている。佐用町昆虫館は、体は小さいが、案外しぶとく生き残っていくのかもしれない。

(やぎ・つよし)



復旧後の広場。2010年3月14日、三田ロータリークラブのみなさんと